

子規はどんな子どもだった? その2

子規、東京へ出る

東京へ行きたい!

松山中学校に通っていた子規は、15才のころから「東京に出て政治家になりたい」と強く思うようになりました。まわりの友達も次々に東京へ行きました。しかし、父親のいない子規は、東京にいるおじの加藤拓川に許しをもらわないといけません。子規は拓川に「東京で勉強させてください」とたのむ手紙を何度も出し、明治16年6月、ようやく「東京へ来てよろしい」という返事をもらいました。

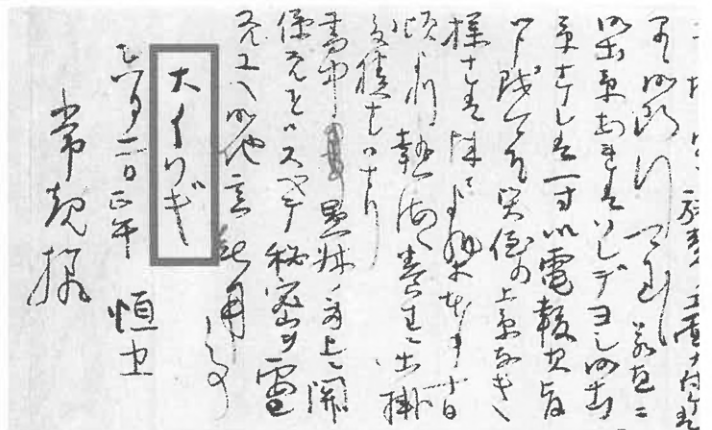
いざ東京へ!

大喜びの子規は、通っていた松山中学校を退学して、大急ぎで2日後に東京へと出発しました。そのころは今のよう飛行機や新幹線はありません。松山から横浜までは船で4日間かかりました。横浜に着いた子規は、できたばかりの汽車で東京へ向かいました。

5日間の旅でした。



展示室でチェック! 子規への手紙



▲加藤拓川から子規への手紙

これは、おじ・加藤拓川が子規の上京を許したときの手紙の最後の部分です。「大急ぎ」と書いてあります。

この時、拓川はフランスへ留学する日がせまってお、出発するまでに子規を東京へ呼ぼうと「大急ぎ」でこの手紙を書いたのです。

学生時代の子規

東京で子規が通った学校

子規は、東京大学予備門や帝国大学文科大学（今の東京大学）で勉強しました。

「筆まかせ」を書く（17～25才）

このころ子規は、「筆まかせ」という文章を書きました。そこには学校生活のことや、鎌倉へ旅をしたこと、友達との手紙のやりとりなどについて書かれています。

メモをとったり文章にまとめたりするのが好きだった、子規らしい作品です。

漱石と仲良しに（22才のころ）

子規は寄席が好きでした。大学で同級生だった夏目漱石も寄席が大好きでした。そしてそれがきっかけで、2人は話をするようになりました。

ある時、子規が書いた文集を読んでその才能にびっくりした漱石は「自分も書いてみよう」と考えました。そして書き上げた作品を子規に見せたところ、漱石の才能に子規もおどろいたのです。それから2人は、お互いに尊敬しあう親友になりました。

ベースボールに夢中（19～23才のころ）

そのころベースボールは、アメリカから日本に伝わったばかりでした。子規はこの新しいスポーツに夢中になり、キャッチャーとして活躍しました。ユニフォーム姿でバットを持っている写真があります。

また、ベースボールの俳句や短歌もたくさん作りました。友達といっしょに書いた小説「山吹の一枝」の中にも、ベースボールの試合をする場面があります。

のちに新聞記者になった子規は、新聞でベースボールのルールを紹介し、試合で使う言葉を訳しました。

子規はスポーツも好きだったんだね。



子規のぼうし



◀内側に「正岡」と書いてあります。



寄席とは？

まんざい・落語などのおもしろい話や、いろいろな芸を見たり聞いたりするところです。子規は友達の秋山真之や柳原極堂たちとよく寄席に出かけました。



▲ユニフォーム姿の子規（23才）

展示室でチェック!

ベースボールコーナー

展示室の最後にあるベースボールコーナーでは、子規とベースボールについて紹介しています。子規が訳した言葉や、ベースボールを題材にした俳句・短歌を見てみましょう。

